演劇と教育——その二——

藤木宏幸

「演劇と教育」——その二——というのは、昨年の本誌二十三号に、「演劇と教育」と題して書いた小文の続きという意味である。

昨年五月の日本演劇学会春季総会で「『演劇による教育』振興についての要望書」が採択決議された。

昨年の小文でも述べたように、日本演劇学会では、数年前から「演劇と教育」の分科会を設けて、各国の演劇教育の実態を調査し、また関東国際高校や兵庫県立宝塚北高校に開設された演劇科の授業を参観するなどして、研究と調査をすすめてきた。その結果、分科会で、日本の公教育に、演劇による教育を導入するようにとの要望書がまとめられ、総会に提案するにいたったのである。

要望書には、「演劇による教育」は、「他者との関係把握と自己客観視の能力を深め、個性を尊重しながら、相互信頼に基づく集団的創造性と協調性を育成する全人的教育」をめざすものとし、あわせて「身体動作をともなう、正しく美しい全身的国語表現力」を開発するものとしている。

演劇の専門人を養成したり、俳優・タレントを生みだす教育なのではなくて、誰でもが持っている個性や創造力をのばし、開発するために「演劇的モデル」を導入してはどうか、ということなのである。「人間形成の総合的基盤をなす全人的教育の核」として「演劇による教育」方法を、日本の初等教育・中等教育に導入してほしい、というのが要望書の主旨である。

そこで具体的にはどういうことか、というと、すでに・小中学校の課程で先進的な試みをしている先生方も多くおられるのだが、国語や社会科などの単元で、教科書をただ読んで文章の内容を理解させるだけでなく、ひとつのシチュエーションを設定し、そこに人物を登場させて、児童や生徒たちがその人物に扮して、即興的に演じてみるという方法がある。その役の人物をとりかえて他の役を演じることで、反対側の人物のものみ方や考えを身をもって体験することもできる。こうして他者と自己との位置関係や、社会のなかの人間関係を、具体的に把握させることが可能となるのである。また小さな劇や戯曲をグループに分けて演じさせてみる。これを装置・照明などたとえ十分な設備がなくとも、みんなの前で発表してみる。劇はなん人かの役を

みんなが分担し、協調して稽古をし、ひとまとまりのあるものにしていかなければならない。劇は、個々の創造力を最大限に発揮しながらも、全体に調和した舞台をつくりあげなくてはならない。音楽でも簡単な装置でも、みんなで知恵を出しあって、力を出しあってつくりあげていくのである。そこに演劇創造のたのしみがあるのだが、それによって「相互信頼に基づく集団的創造性と協調性を育成」していくことが可能となるのである。

「演劇による教育」は、多くの方法が考えられてよいし、またさまざまな方法が可能である。現代の家庭が核家族化し、子どもたちが受験戦争に追われ、孤立化して、現実を逃避し、また相手を追い落す競争社会に生き残らねばならないという現実に、「演劇による教育」は逆に棹さすことになるわけで、むしろそうした、現代社会や教育のひずみや歪みを是正することになるのであるからこそ、現代の公教育のなかに導入されなければならないのだ、といえよう。

国語教育のなかで「話す・聞く」などの国語話法の教育が、ほとんどなおざりにされているのは、昨年の小文でもふれたとおりである。文章の読解力や暗記ものが、教科書でも中心になっていて、話すことや聞くことが、まったく教育されていない。その元兇が現行の大学入試出題にあることも昨年指摘したとおりであるが、〈語られる言葉〉の美しさをもっと初等・中等教育で徹底して教育してほしい。

第一、日常でもテレビをみたり、ラジオを聞いたりしていて、耳障りな日本語がなんと多いことだろう。発声・発音の訓練のできていないアナウンサーや放送タレントが横行しているさまは、なんとも異様である。

ある国語学者ご推奨の黒柳徹子などというタレントの言葉は、日本語として私には聞くに耐えない。サ行の発音、タ行の発音が正確にできないから、みなシャシュショとチャチュチョになってしまう。母音の無声化が満足にできないから、クシャクシャいってる汚ならしい日本語となってしまうのである。

フジテレビの昼のニュース担当の小出美奈とか、夜のニュースを担当して評判となった幸田シャーミンなどみな同様であり、聞いているラジオに、桑田佳祐の奇妙な抑揚の日本語の歌が入ると、私は思わずスイッチを切ってしまう。昨年からテレビでは、ニュース番組を強化する動きが各局に出てきて、その「キャスターの日本語診断——発音は人なり」という記事（「週刊朝日」87・11・6）が目についた。そのなかで学習院大学の大野晋教授は、「最近は英語ふうの日本語の発音をする人が若い人に多くなっている」ことを指摘しておられるが、まさにそのとおりで、前記の人びとがみなそれにあたる。そういえば、電車やバスのなかでも、大学のキャンパスでも、こういう奇妙な話し方をする若い女性が多くなったのは確かである。日本語をなぜ正しい日本語として発音できないのか。私は偏狭な民族主義者ではないつもりだが、家庭や公教育の課程で、もっと「話す・聞く」教育が正確に行われなければならないと痛感している。

「演劇による教育」が、現実のものとなるには、まだ時間がかかるかもしれないが、画一的な教育を排して、個性的で創造的な教育をするためには、この教育の理念と方法がもっと人びとの間に認識されていってよいのではないかと思う。私たちは、具体的な方法をさらに煮つめて、それを多くの人びとに提起していくつもりである。